

バンコクで乗った飛行機がコルカタ（カルカッタ）を経て30分ほどすると、隣の席にいたブータン唯一の新聞「クンセル」編集長のキンリーさんが「ヒマラヤを見るのは初めてですよ」と窓の下を見るようすすめる。視野に入ったのは緑の山々だった。山頂近くまで棚田がある。点在する集落が見える。高い崖の上に寺院がある。

大阪大学の草郷孝好教授、ジャバンフアウンデーシヨンの小島寛之さんと8月下旬に訪れたブータンは、既視感の国だった。どこへ行っても、どこかで見たことがあると錯覚する光景があった。

空港の町パロで車に乗り、谷川に沿った山道を2時間半ほどかけて首都ティンブプーに着く。中心街は箱根の温泉街を連想させた。柳の並木、近くに見える清流、道行く人たちが着ている日本の丹前に似た民族衣装。いずれも違和感がない。

農村に行けば、『次郎物語』の次郎や『路傍の石』の吾一が歩いてきそうな風景がある。家々のつくりは貧しさをうかがわせる。電気のない村も多い。が、あたりはすべてが潤いある緑であり、枯れた土地や遊んでいる土地は見

あたらない。

1 972年に即位した第4代国王のジグメ・シンゲ・ワンチュクは「GNH (Gross National Happiness 国民総幸福) がGNP (国民総生産) よりも重要だ」と述べた。ブータンのような自給自足に近い農村経済では、取り引きされる物やサービスの価格によって計算されるGNPやGDP (国内総生産) は低くなる。生活実態を正確に反映していないと考えたのだろうか。

GNHはブータンではよく知られた言葉だが、定義はない。何をデータに選び、どんな計算をすればいいのかわかっていない。幸福感は個人的なものだから計量化は難しい。客観的な物差しはあるだろうか。わたしたちは旅の間、そんなことばかり議論していた。

テ インブプーから5時間近く山道を走った。江戸時代の宿場町のような小さな町を抜け、車はワンデュー・ポダン村に着いた。農業を営むキンリーさん（43歳）のお宅を訪ねた。インタビュに加えて、家庭食を経験させてもらったためだった。

昼食は炊いた赤米、エマダッチ（緑のトウガラシとチーズをあえたブータンの代表的料理）、干した牛肉、ヤギの乳の

ブータンは 国民総幸福（GNH）の国

伊奈久喜
日本経済新聞論説委員

液体ヨーグルトだった。一つの皿に赤米とエマダッチ、牛肉をとり、赤米を手で丸め、エマダッチをつけて食べる。エマダッチは辛いが慣れればおいしい。手掴みには苦労したが、案内してくれたブータン研究センターのサンドラツプさんは慣れた手つきでたちまち平らげ、わたしたちを驚かせた。

幸福を感じる瞬間はいつか、キンリーさんに聞いた。「農閑期の冬、みんなが家に集まるとき」と答える。奥さん、2人の子ども、奥さんのお父さんの5人家族で1年に4万ニュルタム（10万円程度）で暮らせるという。なぜブータン人は幸せかと質問を続けた。答えは「平和で自分のために働けるから」。古代中国の鼓腹撃壤（世の中の太平を楽しむこと）の空間を思わせる。



山の頂き近くまで棚田が広がるのは、典型的なブータンの農村風景。日本だけでなく多くのアジアの国々にも共通する風景だ

写真提供：筆者

政

府高官や研究者を含めて多くの人々に会った。最も印象深かったのはティンプーの隣県プナカのごエンシリ村のタシテインジン村長（35歳）だった。独学で習得した完璧な英語を使い、村に早く電気を引きたいと語る。10歳以上年の離れた弟がインドに留学して医学を勉強しているとうれしそうに話す。明治維新を担ったのは彼のような人物だったのではないかと飛躍した連想がよぎった。

村長の奥さんの父親ドルジさん（78歳）は、ブータン農業の育ての親で「ダシヨール・ニシオカ（西岡卿）」と尊敬される日本人、故西岡京治氏の教え



→ブータンの民族衣装を着たレストランの従業員。日本の丹前を思わせる懐かしい衣装↓伝統的な料理。赤米の上に、干し肉、野菜、トウガラシなどが盛りつけられている
ともに撮影：小島寛之



を受けた一人だった。「何も生産しなかった土地がダシヨール・ニシオカに教わった野菜づくりで年に6万ニュルタム（15万円程度）を稼ぐようになった」と語る。田んぼの周りの動物よけの柵も西岡氏の考案だという。

自

殺者数が7年連続で3万人を超えた日本から来た旅行者の目には、のどかなブータンは幸せを誘う国に映る。だが、現実はその単純でもない。予算の歳入の半分はインドからの無償資金援助、残りは国際機関や日本などからの無償資金援助、急峻な地形を利用して水力発電した電気をインドに売った収入が半々と聞く。インドから

は年間5万人の労働者が流入する。通貨は1ニュルタム＝1インド・ルピーで固定しており、買い物のおつりにはルピーが混じる。

外交・安全保障面でも1949年のインド・ブータン条約による特殊な関係がある。インドの軍事顧問団がティンプーなどの主要拠点に駐留し、軍事支援を提供する。平和に見えるこの国は中印両国に挟まれている。

平地がほとんどないから製造業の誘致もままならない。経済的自立への活路はどこにあるのか。

ブータンでは9歳から学校で英語を教える。だから農山村でも若者は英語ができる。ブータン放送は秋からジャパンファウンデーションが提供したNHK制作の連続ドラマ「おしん」の英語吹き替え版を放映する。舞台となった最上川に似た川がブータンには至るところにある。日本映画のロケ地として売り込めるかもと開発経済学者の草郷さんは考える。エキストラができそうな日本人そっくりの人も多い。

たおやかな稜線を背景にする田園風景は、失われた日本の原風景を感じさせる。懐かしさに触れなくなったとき、あなたも出かけてみませんか。



いな ひさよし ●早稲田大学政治経済学部政治学科卒、日本経済新聞社入社。政治部、ワシントン支局記者、ジョンスホプキンス大高等国際問題大学院 (SAIS) 外交政策研究所フェローなどを経て現職。担当分野は外交・安全保障。1998年度ポーン・上田国際記者賞受賞。青山学院大、聖心女子大で記者の視点から国際政治論を講じる

